

交叉イトコ婚による外婚制の通時的考察

Diachronic Study for Exogamy System with Cross Cousin Marriage

榛葉 豊*

Yutaka SHINBA

Abstract: C. Levi-Strauss noticed that some ethnocultural group has very complicated rules for marriage, for example Cross Cousin Marriage, and that rules seems to hopeless to understand their meaning. Nevertheless, he had shown followings, that rules are combined with the incest taboo with the meaning which insures solidarity of crans through the exchange of woman. But his structural anthropology is synchronic in its own nature. We discuss origin and diachronic evolution of that rules of marriage, compared to the genesis of eye in the context of anti intelligent design of Dawkins. It will be an exercise for the harder problem of the origin of language and consciousness.

1. 序

構造主義の分析例としてよく取り上げられるものに、クロード・レヴィ=ストロースの婚姻規則の研究と神話の構造分析がある。そのうちの、婚姻規則の構造分析と解釈はおおよそ次のような物である。

未開部族には、一見と言うよりもどう考えてもその意味の理解が難しいような、そのうえ非常に複雑な婚姻規則を持つものがある。例えば交叉イトコ婚（次項以下で説明）などと呼ばれる規則あるいは婚姻の制限は、何のためなのか、どういう効果を持つのか、観察者のみならずその規則に従っている当の本人達にも理由がわからない。

それをレヴィ=ストロースは分析して見せて、その婚姻の規則に従った親族の体系は、代数学的にはフェリクス・クラインの4元群で記述されることを（数学者アンドレ・ヴェイユの助けを得て）示した。この婚姻体系においては、社会学者・文化人類学者マルセル・モースが「贈与論」で示したような部族間の贈与が「女性の贈与」あるいは「女性の交換」として行なわれて部族間の親和性、団結性を保っているとして解釈して見せた。この贈与体系のプラットフォームになるのが外婚制を構成する部族たちである。

また、この「女性の交換」は自動的にインセスト・タブー（近親相姦禁忌）を実現していることも示された。そしてインセスト・タブーの意味について言及されている。

レヴィ=ストロースの分析はフェルディナン・ド・ソシュールに始まる構造主義が本来そうであるように、共時態

の研究であって、どのようにしてその体系が起こりえたかの謎には全く答えてくれない。

われわれは、レヴィ=ストロースの研究で扱われたような複雑精妙な体系が、どのようにして発生し得たかを社会の規則の文化進化、あるいは最近使われなくなった用語ではあるが「ミーム」（文化をそれ自身が遺伝子であるとしてとらえたもの）としての進化として通時態で考察したい。

この婚姻規則の様な精妙で何かの「目的」を持ったように見える何ものか、そして漸進進化の途中に適応度の大きな峠があるように見えるものの進化については、リチャード・ドーキンスたちが精力的に「知的設計者」を否定する論を展開している。例えば眼のような精妙な器官の進化についての議論である。

しかしドーキンスの言説はやはり本来の進化論の対象である生物についての考察が主体である。もちろん文化進化を「ミーム」として捉えると言うことを推進したのも彼であるが（現在は放棄したと伝えられるが）、ミーム論で扱われる題材は、流行やちょっとした行動の様式などのようなあまり複雑ではない行動様式（ミーム）についてである。

文化進化の通時的研究の根源的な大問題として第一にそして究極的に考察されるべきものは、言語の発生であろう。そしてそれに伴う意識の発生である。印欧言語を見るまでもなく、言語はその発生した後この2~3000年を見ても、たとえば格変化や性・数などが省略単純化している。

2011年3月4日受理

* 総合情報学部 人間情報デザイン学科

英語などその典型例である(単純な体系で高度な思考を記述できるというのは「改良」されているとも言えるが)。そうだとすると過去に遡ると複雑精妙な体系があるわけであり(ただし言語の「適応度」,「目的」はわかりやすいとは言えるが)それが適応進化の結果もたらされたとは考えにくいと言う判断に流れやすい。はじめから完成された形のもが「与えられた」のではある。そこからは「劣化」の歴史となる。単純な方が「優れて」いるのなら、なぜなにもないところから、複雑の極みに漸進進化してその後単純化に反転したのかである。人類にとっての世界の環境要因が数千年前に変化したということになる。ソシユールの言うように「言語は一気に出来た」のか、と言う謎である。

言語の発生という究極的難問の予備的な考究として、婚姻規則の(共時態ではなく)発生の研究とその規則の意味を考究する立場の検討のような考察は練習問題として機能するであろう。

2. 部族レベルでの外婚体系を実現する個人間の婚姻規則の構造とその代数的表現^{1~3)}

扱う題材の「複雑さ」と「精妙さ」を感じ取るために、レヴィ=ストロースの研究した婚姻体系の内からキャリア型を見ておこう。

○キャリア型婚姻体系

婚姻クラス間の女性の限定交換

2つの双分半族の間の外婚制である。しかし表だって半族内での婚姻禁止のような、マクロな規則によるのではなく、ミクロな交叉イトコ婚奨励という現象により、マクロな外婚制が実現されるものである。

マクロな規則というのはたとえば、朝鮮族に見られる「同姓娶らず」のようなものである。

この例はオーストラリアのアボリジニ、キャリア族で観察されたものである。

まず交叉イトコの説明。

イトコとは親の兄弟姉妹の子供のことである。ここからの用語は男性中心の関係で見た記述法になるが、女性中心でももちろん記述できる。

交叉イトコとは、ある結婚しようとする男性の父親の姉妹(異性のキョウダイ)の子供のことである。男性が結婚しようとするのであるから、相手は女性であり、実際は父親の姉妹の娘である。これを FZD 婚という。Father's Sister's Daughter である。(Sister は Sun と区別するために Z を用いる)

交叉イトコは男性の母方でも考えられる。MBD 婚(Mother's Brother's Daughter)である。これは女性から見れば父方交叉イトコ FZS に他ならない。交叉とは親の異性のキョウダイの子供を意味する。

一方、平行イトコとは、父親の兄弟(同性のキョウダイ)の子供、または母親の姉妹(同性のキョウダイ)の子供である。平行とは親の同性のキョウダイの子供を意味する。

一般に世界の多くの社会では平行イトコ婚は禁止される傾向が強い。

FZD 婚と言う術語は、「FZD 婚は奨励または義務化されているが、同時に交叉イトコでも母方の交叉イトコ MBD との結婚は禁止されている」ことを言う。この見方は男性から見てのことであり、女性から見れば同じ関係が父方交叉イトコ FZD になるがこれは禁止されているのである。

母方交叉イトコ婚の部族もあるし(この場合父方交叉イトコ婚は禁止されている)、双方交叉イトコ婚(父方交叉イトコと母方交叉イトコを区別せずに、それとの結婚を奨励する)の部族もある。

ここで注意しなくてはならないのは、必ずイトコの範囲で結婚しなくてはならない、即ちイトコの結婚相手が無かったら独身で終わらなければならないと言うのではなく、それ以外の遠縁とか他人との結婚もあるのである。

また何%が交叉イトコと結婚し残りの結婚がそれ以外の結婚かなども大切な要素である。

このことは、婚姻規則が役割を演じる、結婚相手の範囲の全体集合が何かと言うことで、生物学的に子孫が作れると言うことから始まって

人類, 外国人

社会全体, 民族

クラン, 婚姻クラス

家族

のように、可能性の範囲は狭まってくるわけであるが、ここで問題になっているのは下から2つめまでの範囲である。

さて次に、マクロに観察されたキャリア族での外婚制を見てみよう。

多くの未開部族社会では、社会を2つの部分集合に分けた2項対立で象徴される双分半族と言う概念が観察される。文化人類学の重要な考察対象であるがここでは割愛するが、キャリア族は双分半族が、そのそれぞれが同様の意味で2つの婚姻クラス(婚姻に関してその集団内と集団外を何らかの意味で区別する)に分かれている。これは2値をとる添え字が2つあるようなものである。結局4つの婚姻クラスがある事になる。これらを A1, A2 と B1, B2 としよう。

キャリア族では全員がこれらのどれかに属している。A, B は母系半族(その半族に属するかどうか母系で伝わる)を表す。

キャリア外婚制の規則：
 $A1 = B2$
 $A2 = B1$

ここに $=$ は結婚を表す。一方世代が変わるとき（つまりその結婚の子供の属性は）上の表の上下が入れ替わる。たとえば $A1$ と $B2$ の子供は、母系で半族は伝わるから、 $A1$ が母親だったら子供の婚姻クラスは $A2$ になる。 $A2$ と $B1$ の結婚では $A2$ が父親だとすると、その子供の婚姻クラスは $B2$ となる。このことは子供が息子でも娘でも同じである。

ここで母子関係にともなって世代ごとに交替する、1, 2 の別は父方の居住集団を表す。言い方を変えれば、居住集団は父方であるから、父の数字を受け継ぐといっても良い。父と母は必ず居住集団が異なっていなければならないという規則であるから、母の居住集団は父の反対であり、従って父と同じと言うことは、母系半族と居住集団の変化を母に一元化して記述すれば母の居住集団の反対になるということになる。

要約すると、

- i) 「姓」と居住地が異ならねば結婚できない。 外婚制
- ii) 「姓」は母から受け継ぐ。 母系制
- iii) 妻は夫の元で居住し家族を作る。 夫方居住

となる。

レヴィ＝ストロースはフランス人読者向けに次のような説明をしている。A はデュラン家、B はデュボン家である。両方の家系はそれぞれパリに住むものとボルドーに住むものがある。2つの町が互いの絆を強くするためにある町のある家系のものは、相手の町のしかも家系の異なるものとのみ結婚できると言う婚姻規則を作ったとしか考えれば理解し安いであろう。

この体系はクラインの4元群と同型である。クラインの4元群は位数2の巡回群の直積と同型である。この際それぞれの位数2の巡回群は、母系半族の交換と父系で伝わる父方居住集団の交換であり、それぞれの生成元は α と β である。すなわち A と B の交換操作が α であり、1 と 2 の交換操作が β である。A と B も 1 と 2 も同時に交換する操作は γ となる。

	I	α	β	γ
I	I	α	β	γ
α	α	I	γ	β
β	β	γ	I	γ
γ	γ	β	α	I

Fig-1 4元群の演算表

この外婚体系は双方交叉イトコ婚を行うことで実現されることがわかる。

たとえばあなたが $A1$ の父と $B2$ の母の間に産まれた息子であるとしよう。あなたの婚姻クラスは $B1$ である。するとあなたが結婚できるのは $A2$ の女性しか居ない。他の女性との結婚はタブーである。

それでは $A2$ の女性とはどう言う女性であろう。社会がある程度大きければ、近親者でなくて $A2$ という女性はいくらでも居るであろう。しかし逆にイトコの範囲内で考えてみよう。あなたの父方交叉イトコの女性は次のようになる。あなたの父方の伯母又は叔母は $A1$ である。従って父方交叉イトコの母系半族は A である。居住集団は父方で伝わる。すなわちオバの夫の居住集団である。オバの夫は $B2$ であるから 2 という居住集団である。従って父方交叉イトコの女性は $A2$ である。

母方交叉イトコはどうであろうか。母方のオジは $B2$ である。その娘の母系半族は $B2$ であるオジの結婚相手である $A1$ の母親の娘だから A になり、居住集団はオジの 2 を受け継いで $A2$ である。

こうして双方交叉イトコは $A2$ であり、あなたが唯一結婚できる婚姻クラスに入っている。

一方、同じイトコでも平行イトコはどうであろうか。あなたの父方のオジの娘 FBD は $A1$ であるオジの娘であるから、オジの妻 $B2$ の娘であり $B1$ である。また母方のオバの娘 MZD は $B2$ であるオバの娘であるから $B1$ である。

したがってあなたが父方母方問わず平行イトコと結婚することはタブーである。

ここで注意しなければならないのは、ミクロな規則である双方交叉イトコ婚とマクロな現象であるキャリア型外婚制の関係である。同じ代数構造のミクロとマクロの表現になっていると言える。しかし全く同じ必要十分条件というわけではない。2つの家族の間で交叉イトコ婚を代々続けていけばキャリア型外婚制が結果する。しかしイトコ以外と結婚することもあるから、交叉イトコ婚でない結婚をしていてもキャリア型外婚制は達成しうる。

交叉イトコ婚が行われていても、実際にイトコと結婚するものは 10~30% だという。それ以外は、外婚体系の規則には合致したイトコ以外の遠縁の女性と結婚するという。

2つの家の間で双方交叉イトコ婚を代々続けていく場合、2つの家は、男性が姉妹を妻として代々交換していることになる。これをレヴィ＝ストロースは「限定交換」とよんだ。その解釈については次項で考える。

2つの半族間の女性の交換というのではなく、たくさんの部族の間での、順繰りの女性の「贈与」の形となっている部族間の婚姻関係もある。これは「一般交換」と呼ばれる。詳細は割愛するが、

双方交叉イトコ婚 → 限定交換
 父方交叉イトコ婚 → 一般交換 (短いサイクル)
 母方交叉イトコ婚 → 一般交換 (長いサイクル)

となる。限定交換は $A \leftrightarrow B$ の交換、短いサイクルとは $A \Rightarrow B, B \Rightarrow A$ であり、長いサイクルとは $A \Rightarrow B \Rightarrow C \Rightarrow \dots$ という女性の贈与である。ここで父方と母方で現象が異なるのは、基準になるのを息子にとっているからである。父方交叉イトコというのは、男女の対称性を重んじるなら「同性親方イトコ婚」と表現すべきものである。

付け加えるとカリエラ型同様 4 つの婚姻クラスを持つムルンギン型婚姻体系というものも観察されているし、もっと複雑な 8 つの婚姻クラスを持つアランダ型婚姻体系も観察されている。カリエラ型はそれらの中では単純な部類である。

ここで単純な疑問が起こるのであろう。親族としての距離は等しいのになぜ交叉イトコは奨励されるのに反して平行イトコだけが禁止されるのかであろうということである。またカリエラ族とは別の部族で、交叉イトコの中でも父方と母方が区別され片方のみ奨励され片方はタブーである部族もある。生物学的には等距離の親族関係なのにえり好みしているかに見えるのと言う謎である。これは、そのえり好みの仕方によって、交換サイクルの種別が変わるので、適応度が異なると言うことで説明されることになるのであろう。

筆者にとっての問題は以下のようなものである。このような複雑な規則が、その意味合いが当事者にも分からないまま維持されているわけであり、しかしながらその意味が文化人類学者によって解明されていて、なにか適応度の高い規則であると思われるわけであるが、そのようなものが適者生存というような機構で漸進進化することが出来るのであろうかと言うことである。

当事者の誰かがこのような複雑なメカニズムをある目的のために発見発明して、社会の規則として強要する言うことは不可能であろう。

またいろいろな婚姻規則を試してみると言うこともあり得そうにない。そして、わずかに違う婚姻規則あるいは結婚形態が現れ淘汰されていくというのもありそうにないのではと言うことである。(交叉イトコ婚で言うと、交叉イトコ婚率は 30% ぐらいというから、そのぐらいで淘汰圧はわずかではないかとも考えられる)

淘汰によるものだとしても、ヒトが婚姻形態という様なことが問題になるようになってから、何百何千世代で変化があるものかも定量的に検討しなくてはならない。

また霊長類学などでも明らかにされているように、群れの社会構造と交配の関係であるとか、それ以外の哺乳類などでの婚姻形態の研究などからもいろいろな知見がある。哺乳類での家族の発生であるとか、近親相姦忌避の知見もある。したがってヒト以前に遡って考えることも必要かもしれない。

3. 女性の交換と部族の親和連帯^{1~5)} そしてそれによる文化進化

モースはニューギニア北東方の島々の住民の間に見られる、そのもの自体はあまり価値の無いようなものを順繰りに莫大な精力を傾けて贈与していくという風習について論じた⁴⁾ (クラ交換)。類似の風習は北米北西部先住民の間でも広く見られる (ポトラッチ)。但しこちらは自分の生計を危うくするような貴重品を贈与して社会の中の地位を高くする。

クラ交換は島々の住民の間で連帯を高めるためであると言われる。貸し借りを作るとも言えるが、そのもの自体に価値がないからこそ、交換の場で価値が生じ、社会の風通しを良くするとも言える。貨幣もそもそもそういうものである。貨幣は交換に使われなければ意味が無い。そのもの自体の価値があって、ある個人の所のためにため込まれたりしない方がいいのである。

レヴィ=ストロースは交叉イトコ婚を女性の交換(あるいは贈与)によって部族社会の連帯を高める効果がある婚姻形態であると説明したのである。自分の妻にしたいのを「断念して」他の部族の男に「贈与する」というのである。

そこでは、自分の妻にすると言うことが所謂近親相姦と呼ばれるものであり、それが生物学的な不利益があるかもしれないかと言う議論はないし、実際にも生物学的理由は疑わしい。このことは次項で論じる。

カリエラ型双方交叉イトコ婚は、自動的に平行イトコについてのインセスト・タブーを実現している。そのことも含んで、より近親である姉妹との結婚も、妥当なことに前項での例で言えば B1 の男性にとり結婚できるのは A2 の女性であり、その姉妹は同じ B1 であるから、インセスト・タブーにかなっている。このような意味での、インセスト・タブーと外婚制の関係が一般に代数構造的に必然なのかどうか吟味しなければならない事柄ではある。

さて、女性の贈与と部族の連帯、そしてその部族の連帯がその婚姻規則を持つ部族の適応度を高めるかの問題である。ミームの立場から (通常の進化論で、遺伝を遺伝子が司り、また遺伝子が進化、淘汰を受け適応度が付与される単位である事と同様に、文化進化において淘汰を受ける文化の単位をミームという^{6・8)}) 言えばたとえばカリエラ型婚姻規則というミームが進化するためにはその適応度が他の婚姻規則より高く淘汰に生き残らなくてはならない。

進化論では目的論的な用語や概念は避けなくてはならない。しかし、以降、記述の経済のために括弧付きで用いることにする。

交叉イトコ婚は何に対して有利であるのかと言う問には、あるいは「目的」はなにかと言う問に対しては部族の連帯に対してであり、連帯した部族集団は他の部族集団より残りやすい。従ってその部族集団に担われている婚姻規則は淘汰に生き残ると言う説明になる。ミームを背負っている部族集団の間の競争である。

複雑な婚姻規則のような場合、その規則に従っている当事者は、何故その規則に従う方がいいのかの理由は分からないであろう。またその規則に「目的」があるのか、どう「有利」なのかも分からないであろう。またある禁止されるべき事項があり、その禁止を実現するために、全く関係が無いかに見えるある規則に皆が従えばいい等という事は、当事者達が考え出すことも関連性を思いつくことも出来ないであろう。

もしそうなら、その点ではネオ・ダーウィニズムの言うような微小でランダムな突然変異による変動からの淘汰選択の描像と似ていると言える。

しかし文化進化の場合は、当事者あるいは部外者が、何かの「目的」に対してどう言う規則が「適応的」結果をもたらすかを「工夫」、「考察」、「設計」して部族民に強制するとか説得、交渉する、と言う位相もあり得る。その改良案の実験が出来るのかという疑問もあろうが、実際に集団ごとに別種の改良案が出現して、それぞれの部族が別々の規則を採用し、それらの集団間の競争によって、ある規則を担っている集団が生き残ると言うことは大いにあり得る。ひいてはそのミームが生き残るのである。このような場合、漸進的なゆっくりとした進化ではなく、数世代で変化が起こる「一気に変化する」進化がおこる可能性がある。ここが、普通の進化の問題とは異なるところであろう。

これは生物の進化での「獲得形質の遺伝」に対比できるものである。その上変化の成果を評価し自身で選択できるその集団の人間が改良していけるのであるから、集団間の競争と相まって、定向進化は有りうるし、進化のスピードも速いだろう。ただし、ミームを背負った集団間の競争と、ミーム自身の競争は分けて考えなければならない。

ただし、ある「名案」の設計を相談して採用することを説得、交渉しそして実行するというのと、ランダムな「案」を採用してみてもうまくいけば取り入れ、駄目なら廃れるというのでは、その規則の理由が後代に分からなくなっていく経緯などは違うであろう。

ところで、眼のように非常に複雑で、しかもすばらしい合理的構造を持ち、そしてそれが出来る過程を考えると適応度が低下する局面があるのではないかという器官の進化について、ドーキンス達は「知的設計者」論を排するキャンペーンをずっと行ってきた⁹¹¹⁾。

我々が直面している婚姻規則の進化の場合、規則が自然

発生した自然に突然変異すると言うだけではなく、「知的設計者」ならぬ当事者や外部社会からの「思考」によって変異がもたらされると言うメカニズムも考えた方がいいのではないであろうか。同じ文化進化でも、「言語の発生」はそもそも言語無しでは思考や自意識もあり得ないであろうから、全く自縄自縛になってしまうが、婚姻規則の方は「思考」は既に獲得されていたとして良いのではないだろうか。

レヴィ=ストロースは、観察したいろいろな婚姻規則の構造を比較し、前項で説明した、限定交換、短いサイクルの一般交換、長いサイクルの一般交換等の得失を、贈与をしてからの受け取りまでの時間差による投機性などの考察とともに論じている¹⁾。

限定交換を現出する双方交叉イトコ婚は 2 集団の強固な同盟であるとか、母方交叉イトコ婚の長いサイクルの一般交換は円環をなす統合体であるとかである。父方交叉イトコ婚は相互的な交替贈与であり脆弱な同盟関係となるのかも言われる。

嫁資も含んだ投資という意味では限定交換は直接的な互酬性である。一方一般交換は直接の相手からの返酬は期待できないから、より部族間の信頼関係に基づいているとも言えるのではないであろうか。投資が返ってくるのは女性を贈与した相手からではなく、巡り巡った別の部族からなのであるから、部族集合体の安定が前提となる。

互酬性ではあまり信頼していなくても、目前の束縛条件で短期的に信頼しているような行動を起こしうる。

これらの信頼、協力、連帯の発生と言うことの考察は繰り返し型囚人のジレンマをはじめとするゲームの理論、そしてもっと広く行動経済学、実験経済学分野との協働で取り扱うべき内容であろう。

ヒトというと 100 万年前、農耕の開始とそれに伴う富の蓄積、不平等の発生などが 1 万年位前等と言うが、この程度の時間、または農耕開始以来数百世代と言う短期間に、婚姻規則の進化が起こりうるかどうかという問題を考えてみよう。

インセスト・タブーは次項で考えるようにサルやもっと下等な動物社会でも見られる現象である。すると農耕や階級や格差の成立などから後の時間に限定せずにもっと古くからのこととして考えた方がいいかもしれない。しかしその内容からして、言語の発生についてソシュールが一気に出来たと言ったように、婚姻規則の発生も一気に出来たことではないだろうか。言語の場合、世界には数え切れないほどの数の、単語や発音体系が異なるだけでなく、文法が異なる言語があるわけである。言語の違いは部族によっての婚姻規則の違いに相当する。他の部族に育てられれば当然その部族の婚姻規則が自然に思えるわけで、インセスト・タブーの範囲も育てられた環境に依存するであろう。

チョムスキーの言うような普遍文法に相当するような、生物学的な婚姻に関して社会規範に従うような傾向性は漸進進化したかもしれないが、具体的な婚姻規則は一気に出来たのではないかと思う。

ここに、池田が示す一つの例がある（『さよならダーウィニズム』¹²⁾ p164）。それはニカラグアの新設の聾学校での出来事である。そこでは全く新たな「手話言語」がゼロから5年程度の時間のうちに出来てしまったという。各所から集められた、共通の手話を持たない生徒達の間で一気に自然発生したのである。いったん出来るとそれは変化しない。ピジンからちゃんとした文法体系を持つクレオールへの道を急速に歩む。（ここで注記するなら、たとえば日本語手話と日本の手話言語は全く異なる。「日本語手話」は、音声言語である日本語の pantomime。一方「日本の手話言語」は日本語とは別の文法と構造を持った言語。この事情は英語手話でも同様である。）

今後このような、急速なゼロからの規則の自然発生の事例を調べ、分析考察して行かねばとおもっている。

4. インセスト・タブー¹⁵⁻²⁰⁾

レヴィ=ストロースの婚姻規則の研究では、たとえばカリエラ型婚姻規則でも、その規則又は外婚制が自動的に包含しているインセスト・タブー（我々にはイトコ婚などはインセストではと感ぜられたりするが）については、別段深い意味合いや禁忌しなくてはならない理由があるとは分析されない。むしろ外婚制を保証するため、自分のものにしたいのを断念して他部族の男に贈与する女性と言う資源を確保するメカニズムになっていると言う説明である。インセスト・タブーの役割は連帯のための贈与と女性の原資作りという説明である。

しかし、一般的にはどのような感覚を持つ事柄であろうか。一般の知識人は次のようなインセスト・タブーの理由を挙げるであろう。

- i) 生物学的理由： 所謂「近交劣勢」、そして遺伝病が発症するなど。
- ii) 社会的、心理的理由： 近親者との性交には不快感や嫌悪感がある。家族の有り様を崩す。
- iii) 法律的理由： 相続の際などに混乱が起こる。一意的に近親度が決まらなくなったりする。

iii)は現代社会においての理由でありここで取り上げる様な事柄ではないと思われる。主体は i)であろう。もしインセスト・タブーに本当に生物学的理由があるとすれば、外婚制を通じての部族の連帯ということに対する貢献と一石二鳥ではある。

しかし文化人類学の本などには、特段の生物学的な禁忌

すべき理由はない、とある。遺伝的な病気が発症してしまうというのはもっともな理由ではあろうが、決定的に禁忌すべき理由とも思えない。「近交劣勢」の方は、近親交配で直ちにまずいことが起こるというのではなく、近親交配の方が適応度が劣る子供が出来るという事、さらには代々近親交配していくとその系統は何らかの方面での弱点を抱え込むと言うことである。

だが、近交劣勢という事実が認められたとしても、適応度ではなく、詳細は割愛するが、社会行動の進化を扱う場合の概念である「包括適応度」で考えると直ちにその系統がまずくなるというわけではなくなる。良い性質も強くであるであろうし、個体レベルで考えれば自分の遺伝子はインセストの方が強く伝わる。

更には、体質や病気という点で「近交劣勢」が有っても、近親交配の方が有利な場合もある。たとえば、通常インセストの方が、出産年齢は低い。すると早い時期から次の世代の繁殖生産に入ることが出来、子孫の数は多くなる。

近交劣勢は実際あるが、そのことは直接インセスト・タブーの理由にならないという文化人類学者の考えは、妥当であろう。インセストは人類にとって普通のことである。またタブーがあるのは、タブーとしなければいけない程度には実際に行われているという考えもあり得る。近交劣勢と他の近親交配が有利な要因の兼ね合いで、インセスト・タブーがどうなるかは変化していくのであろう。

ここでよく引き合いに出される、ヨーロッパの王室の例に触れよう。近親結婚が非常に多いのは、社会的な制限で結婚相手が王族に限られるとか、資産を分割散逸させないためとか言われる。オーストリアとスペインのハプスブルク家のことは近交劣勢の例としてよく取り上げられる。

また文化人類学でまず取り上げられるのは、古代エジプトの例である。近世ヨーロッパの例とは異なりエジプトでは王族だけではなく、庶民も近親結婚が多かった。むしろ近親結婚の方が普通だったなどと言われる。インセストの事を「畜生道」などと言うが、畜生の方がインセストは少ない等とも言われる。それが何故近代になりインセスト・タブーは強くなったのか。

とにかく、近親交配してきた集団が淘汰されてきたと言うことは考えられない。

そこで ii)の近親者との性交には、嫌悪感であるとか不快感とかを感じるから、と言う理由を取り上げてみよう。これはこの理由の妥当性を探ると言うことである。

インセストを回避するにはヒトに限らず 2 つの方法がある。一つは近親の個体を認識し、個体を感じる「嫌悪感」から意識的に避ける。

二つ目はメス（オス）が成長した後は別の集団に移る習性なら、近親者が会うことはなくなり結果インセストは回避される。いわば制度としての回避である。

二つ目の方法はサルの社会などでよく見られるメカニズムであるが、ヒトの外婚制も全く同様の機構であると言える。しかし外婚制の理由として（ここでは外婚制をインセスト回避の方法と言っているわけであるが）、インセスト嫌悪を採用するのは思考方法としておかしいだろう。

外婚制 → インセスト回避される

外婚制 ← インセストは嫌悪される

インセストは嫌悪されるので何かの方法を用いて回避している、と言っているだけである。その方法が外婚制だと言うだけである。インセストは何故嫌悪されるかには全く答えていない。生物学的理由がないと言っても、構造主義人類学者の言うような贈与の原資作りのための機構というのは説得力に欠ける。

さて、一つ目の個体を認識してインセスト回避をすると言う機構にもどって考えよう。近親者を認識してもそれの性交に嫌悪感を覚えなければ回避は成立しない。嫌悪感は生得的なものであろうか、社会の圧力であらうか。

生物学、社会学からいくつかの例を引くことができる。人類学に「ウェスターマーク仮説」というものがある。1891年『人類婚姻史』でウェスターマークが提出したとされる説で、親しく育った間柄では生物学的血縁がなくても性的なことに嫌悪感を覚える、と言うものである。

一緒に育つと言うことと、実際に兄弟姉妹事の差異があるか、お互いに見分けがつくかどうかの統計的研究があるかどうか筆者は知らない。

明らかに血縁はないことは分かっている場合の実際の観察例がある。台湾に「シンプア」と呼ばれる幼児婚の風習があった。嫁を幼児のうちに決めて、養子か兄妹のように貰い受けて育てるというものである。成長後の性生活がうまくいくのかの研究がある。

またイスラエルのキブツの観察例がある。共同生産生活体キブツでは、子供は親からは離されて一緒に育てられる。成長後、キブツで一緒に育った仲間と結婚することが多い。離婚率や夫婦仲はどうかの研究である。あまりはっきりしたことは言えないようであるが、兄妹のように育っても絶対駄目というわけでもないようである。しかし普通の夫婦よりは性的魅力を感じないという傾向はあるようである。

A：「兄弟間（なじみが深い間柄）では非血縁者間よりも性的魅力が低くなる」と言う命題と、B：「これは近親婚回避の進化メカニズムであると思われる」を考える。Aは事実として認められるだろう。しかしその理由が（原因が）それ自身何のためか分からない回避のためで有ると言っているBとは言えないだろう。

交叉イトコ婚の体系自身からすれば、それを実現するためにAがある。部族の連帯 → 女性の贈与 → 交叉イトコ婚 → インセスト・タブーおよびAと言う邇及である。そうではなくてA自身の独立な説明が必要な

ではないだろうか。

ヒトは外婚制のような規則の社会の下で生まれ育ち暮らしてきたから、近親相姦がいけなく感じられてくるのだろう。家族としての感情体系による安定を「守るため」とも言える。

統計学者ロナルド・フィッシャーのランナウエイ仮説というのがある。1930年の『自然淘汰の一般理論』²¹⁾で唱えられたものである。それは、「特段の意味や有利さがなくても集団内で好まれていればそのように進化する」と言う説である。

例としては鹿の大きな角やクジャクの尾などが有る。最初は角が大きい方が雄同士の対戦で有利であるなどの性淘汰上の理由があったであらう。実際に適応度が高いのである。しかし現状はその程度を大きく行き過ぎて、生存に不利なまでになっている。本来の「目的」から逸脱している。しかしそれを雌が好むならその方向に生存できる限度まで進化する。雌の立場からすれば、そのような雄を選ばなければ不利になる。角の大きい雄を選べば、その雄の子である自分の息子の適応度は上がり、息子は多くの雌から選ばれるであらう。多きに付け、人気があるものを選べ、である。

これはつまり間主観的決定で、経済学者ケインズ²²⁾の美人投票ゲームと同じ事である。美人投票では多くの人が美人と投票した人に投票した人が多くの得点を得る。それは自分が美人と思うと言うのでは無い。多くの他人が美人と投票する人である。しかしさらに言うと、単純に個々の他人が美人と考える（投票するので無く）だらう人でも無い。他人が私同様の他人の推論を推し量る推論をして投票し、集計結果として美人という世論が出来るであらう人を選ばねばならない。つまり流行を推測しなくてはならない。それには、自分以外の他の全ての人の好みを推測するだけでは足りないのである。個々の人みんなが嫌っていても、ホモ・エコノミクスの行う「合理的推論」によって、歴史の偶然により「人気があり続ける」事があるのである。

これは株式投資では、実態が無く不利な公開情報ばかり伝わってくるのに値を下げないなどという状況でおなじみのことである。

なぜだか理由は（今は）無いが、みんながそうしているからインセストはタブーであるのである。そうすると、逆になぜだか知らないが、みんながそうするというのなら、本来何か非常に重要且つ致命的な理由があるのではと、無知故の恐れが生じて恐怖感、嫌悪感にロックオンされるのである。

今後の重要な課題は、婚姻規則の社会進化の初期には、インセストには適応度としてどう言うまずい点が有ったのかの解明である。その際、適応度として、そのミームを担っている部族（ドーキンスの言葉で言えばヴィークル）の有利不利とインセスト・タブーというミーム自身の適応度は分けて考えなくてはならない。

5. まとめ

構造主義人類学は、部族間のレベルでの外婚制と個人間のレベルでのインセスト・タブー、それに部族の連帯という3題話を「構造」分析して共時態で鮮やかに解きほぐし解釈して見せた。しかし何故その様な規則が出来たのか、その様な規則がゼロから生成することがどうして可能だったのかなどの疑問には答えてくれない。であるから当然文化進化のスピードなどと言う疑問にも答える気すら無くスナップショットを解明している段階である。

また、レベルの違う規則たちが、一つの代数構造の別の表現になっていることなどの指摘は鋭いが、インセストに関する考察は、現象面とその結果する社会構造の考察が主で、やはり此処でも何故その様な「おぞましい」という感情が進化したのかという疑問が残る。

猿人レベルに遡った頃からのこととして、外婚制が部族に対して有利な点は、部族の連帯、部族集合の統一等という事の他に、例えば贈与された女性に基づく異文化や外部世界の知見の獲得、部族内の行動についての刺激など考えられよう。我々がこれから行わなければならないのは以下のようなことであろう。

- ① インセスト・タブー、外婚制、交叉イトコ婚などのミームとしての適応度が高い点は何か。
- ② 文化進化のスピードの定量的見積もり。
- ③ 文化進化においての獲得形質の遺伝。
- ④ インセストについて、言語の普遍文法のような生得的な何かがあるだろうか。
- ⑤ 同じ距離であるのに平行イトコと交叉イトコは何故差別されるのか。片方イトコ婚で、父方と母方は何故差別されるのか。生物学的理由との関係は、それが無いなら、部族の団結法の違いの現れに過ぎないのか。
- ⑥ 文化進化において、文化を背負った社会集団の競争と、ミーム自身の競争という視点の違いは区別して考えなくてはならない。
- ⑦ 外婚制の規則、交叉イトコ婚の規則などが、漸進的に適応進化したのか、それとも数世代のうち一気に出来たのかの考察。また一気だとしてどのような機構でそれが可能だったか。
これは、言語の発生から意識の誕生という難問への前哨である。

参考文献

- 1) C. Levi-Strauss, “*Les Structures elementaires de la parente*”, (Mouton) 1967
邦訳：『親族の基本構造』、福井訳、青弓社、2000年
- 2) 小田亮, 『レヴィ=ストロース入門』、ちくま新書、2000年
- 3) 橋爪大三郎, 『はじめての構造主義』、講談社、1988年
- 4) M. Mauss, “*Essai sur le don: Forme et raison de l’échange dans les sociétés archaïques*”, ‘*Sociologie et Anthropologie*’, Universitaires de France, 1924
邦訳：『贈与論』有地訳、勁草書房、1962、2008年
- 5) 小野田正喜, 「マルクス主義と文化人類学」, 『文化人類学 20 の理論』綾部編、弘文堂、2006年
- 6) 佐倉統, 『遺伝子 vs ミーム』, 廣済堂出版、2001年
- 7) S. Blackmore, “*The Meme Machine*”, Oxford University Press, 1999
邦訳：『ミームマシンとしての私』上下、草思社、2000年
- 8) L. Cavalli-Sforza, “*Genes, Peoples and Languages*”, 1996
邦訳：『文化インフォマティクス — 遺伝子・人種・言語』、赤木訳、産業図書、2001年
- 9) R. Dawkins, “*The Blind Watchmaker*”, 1986
邦訳：『盲目の時計職人 — 自然淘汰は偶然か』、早川書房、1993年
- 10) R. Dawkins, “*The God Delusion*”, 2006
邦訳：『神は妄想である — 宗教との決別』、早川書房、2007年
- 11) R. Dawkins, “*The Greatest Show on Earth*”, 2009
邦訳：『進化の存在証明』、早川書房、2009年
- 12) 池田清彦, 『さよならダーウィニズム — 構造主義進化論講義』、講談社、1997年
- 13) 池田清彦, 『構造主義と進化論』、海鳴社、1989年
- 14) 池田清彦, 『構造主義生物学とは何か — 多元主義による世界解読の試み』、海鳴社、1988年
- 15) 川田順造編, 『近親性交とそのタブー — 文化人類学と自然人類学の新たな地平』、藤原書店、2001年
- 16) 原田武, 『インセスト幻想 — 人類最後のタブー』、人文書院、2001年
- 17) 長谷川寿一、長谷川眞理子, 『進化と人間行動』、東京大学出版会、2000年
- 18) R. Trivers, “*Social Evolution*”, Benjamin, 1985
邦訳：『生物の社会進化』中島他訳、産業図書、1991年
- 19) 西田他編, 『人間性の起源と進化』、昭和堂、2003年
- 20) D. Premack and A. Premack, “*Original Intelligence — Unlocking the Mystery of Who We Are*”, 2003
邦訳：『心の発生と進化 — チンパンジー、赤ちゃん、ヒト』、長谷川監訳、新曜社、2005年

- 2 1) R. A. Fisher, "*The Genetical Theory of Natural Selection*", 1930
- 2 2) J.M. Keynes, "*General Theory of Employment, Interest and Money*", 1936
邦訳：『雇用、利子および貨幣の一般理論』, 東洋経済新社, 1995 年
- 2 3) 松本編, 『進化論はなぜ哲学の問題になるのか』, 勁草書房, 2010 年
- 2 4) 西脇与作, 『科学の哲学』, 慶應義塾大学出版会, 2004 年
- 2 5) 柴谷篤弘他編, 『進化論とは』, 講座『進化』, 東京大学出版会, 1991 年
- 2 6) C. Renfrew, "*Prehistory*", Weidfeld & Nicolson, 2007
邦訳：『先史時代と心の進化』, 講談社, 2008 年
- 2 7) J. Jaynes, "*The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind*", Mainer Books, 1990
邦訳：『神々の沈黙 ー意識の誕生と文明の興亡』, 柴田訳, 紀伊國屋, 2005 年
- 2 8) E. Neumann, "*Ursprungsgeschichte des Bewusstseins*", Walter, 1971
邦訳：『意識の起源史』, 紀伊國屋, 2006 年
- 2 9) D. Denett, "*Darwin's Dangerous Idea Evolution and the Meanings of Life*", Touchstone, 1996
邦訳：『ダーウィンの危険な思想 ー生命の意味と進化』, 山口監訳, 青土社, 2000 年